

## 第一節 長崎における海軍伝習の創始

ポンペの医学伝習を導く条件として、海軍伝習がある。安政四年（一八五七年）のポンペの渡来は安政二年（一八五五年）に長崎に創始された海軍伝習の教官と交代するために派遣された第二次海軍伝習派遣隊の募集によって実現されたものであるが、この第二次海軍伝習のことを述べる前に、日本で初めて行われた海軍伝習、即ち日本海軍創設のことを示して置こう。

日蘭両国の貿易関係は、欧米諸国の情勢と共に変転し、幕末当時は全く行き詰りの状態に陥っていた。寛政十年（一七九八年）、東インド会社は營業を停止し、翌年、解散したのもフランス大革命の影響であるが、オランダ政府は日蘭関係の更新を企図し、弘化元年七月二日（一八四四年八月十四日）長崎に入港したオランダ船に国王ウィルヘルム二世 *Willem II* の開国を勧める国書を奉呈せしめたのである。又商館長レファイスソン *Levissohn*

のアメリカと日本との交渉に対する態度、後任の商館長ドンケル・クルチウス *Donker Curtius* の幕府に対する勧告も日蘭関係の新しい発展を望むための努力であった。

弘化元年（一八四四年）のオランダ使節の開国勧誘は幕府に大動搖を与え、翌年はアメリカ、イギリス両国船の来航をみて、幕府は七月には文武芸術の精勵、風儀振肅の件を令し、翌月、海岸防禦事務係を設けたりした。この年十二月には、医師の學業を戒勵したが、弘化三年（一八四六年）にはイギリス、アメリカ、フランス三国の船の日本近海游弋があつて、漸次、幕府は態度を開国か鎖国かの何れかに決せねばならなくなった。同年閏五月にもアメリカは通商を求めており、幕末の國際狀態の均衡は益々調整の要に迫られていたのである。

寛永以来の幕府の鎖國政策は寛政時代に至つて國防の

## 第一節 長崎における海軍伝習の創始

重要性を痛感し、幕府の方針もその線で強化されて来ていたが、十九世紀前半期の国際状況の変転を機として、次第にその展開をみせはじめていたのである。嘉永元年（一八四八年）にも外国船の渡来が続き、翌年もイギリスは通商を求めて来た。鎖国政策の理念としては攘夷の思想が附加されて、七月及び八月には海防の修築、訓練大砲の操術等が頻々として令され、九月には砲術稽古の令があった。又、十二月には、防備の厳重を期すべき令が幕府より示されて、開国の気運は全く見られなくなったのである。こうした時、即ち、この年一月には幕府は蘭学医が増加しているが、御医師は蘭法を用いるべきでないとし、内科系の医師の西洋医学の研究と実践を禁じ、外科、眼科等の外治は蘭法を用いてもよいと除外例を設けた。これはオランダ医学の外科系医学における特権を尊重した立場であったが、九月には洋学が盛んになり、蘭書の訳述が多くなったのに対して、浅学の者の取扱いを取締った。

嘉永三年（一八五〇年）に入ると、オランダは風説と

して近くアメリカ人が江戸近海に入って通商を乞う計画がある旨を幕府に伝えているが、この頃より翌年にかけて、財政は窮迫し、遂に嘉永四年（一八五一年）七月には他の土木工事のことに関連して海岸防備による支出多端のため、工事を中止する旨を令したりして、幕府は諸種の禁令を示している。翌五年には、イギリス及びロシア両国船の来航をみたが、八月に入って、長崎奉行牧志摩守はオランダ人の上申によって、北アメリカ合衆国が通商の開始を請う意志を示している旨を幕府に報告し、且つ外国情勢を示し、日本のための良策を奨めた。嘉永六年（一八五三年）にはオランダ人の風説通り、アメリカの艦船は沖繩を経て浦賀から本牧に来たので、六月六日（陽暦七月十一日）、幕府は防備を厳にした。これによって、全く乱衆状態に陥った幕府及び諸藩は攘夷を主張して砲台の構築を議したが、七月及び八月にもロシアの艦船がオランダ風説通り、長崎に入ったのである。九月には幕府は遂に質素令と共に鎖国以来の政策大船製造の禁を解き、海防の準備を整え始めたのであった。十

月に入つて、西洋砲術の稽古を精励すべき訓令を発した幕府はオランダに軍艦及び大小砲、兵書等の送付方を依頼し、一方、隊伍訓練、騎馬訓練を励ましめている。十一月には大船大砲の類の西洋式を用いる必要があるが、訓練の号令、器具機械の呼称は外国語を用いてはいけない旨を伝え、陸上の稽古及び海上の打ち方練習をも令しているのである。このように弘化、嘉永の頃は全く国防、攘夷に明け暮れ乍ら、なお、それに備えるのにオランダを通じた洋式兵備が重視され始めていたことも窺過すべきものではない事実であつた。

こうした世情の緊迫期に、クルチウスは幕府に対して、オランダ政府は日本が船舶の製式を改正しようとしていることを知り、喜びに耐えない。それについては、自ら進んで日本の企てを援助し、操縦指揮の方法なども伝習したいと考えるが、もしその必要があれば地理学、測量学、機関学、造船学、砲術学等の熟練者を派遣して、軍備に必要な學術の教導に充てたい。海上の威力を整備しようとするならば、先ず戦艦、特に蒸気船を持つことが

先決問題であり、そのためには造船所とドックを築造する必要がある旨を伝えたが、幕府もその要を充分痛感していた際でもあって、遂にオランダに依頼して、幕府海軍の創設とその整備を計画したのである。嘉永六年（一八五三年）のいわゆる黒船騒動も、オランダの援助で後進国乍ら独立して対抗しようとする努力に外ならない。

ここで、幕府は、オランダ政府に対して、翌年夏までに、中型武装蒸気船一隻、小型蒸気船二隻乃至三隻、その他若干隻を長崎に回航せしめ、その海上防衛に資することとし、商館長を通じて交渉することとなつたのである。当時、ヨーロッパでは露土戦争の最中であつて、ヨーロッパ諸国が殆んどこれに参加し、甚しい混乱に陥っていたが、このことは幕府の知るところではなく、幕府はたゞ海上防衛を念願していたのである。

幕府の命を受けた長崎奉行はクルチウスに対し、通詞森山栄之助をして口頭で「フレガット船以下蒸気コルベツト船等御取寄」することを求めた。この軍艦購入申込みに対して、クルチウスは嘉永六年九月十三日（一八五

## 第一節 長崎における海軍伝習の創始

三年十月十五日）、本国政府の意向は保証できないが、日本側の趣旨は政府に伝達しようと答え、そのために必要な方法その他についても自分の意見を述べるところがあった。以後、この交渉は頻繁に行われた。

翌七年（安政元年）二月頃には、長崎奉行水野筑後守忠徳は、オランダ船が渡来したならば、その運用方法はどういう風にするかと云う問題を幕府と交渉していた。

同年四月五日（一八五四年四月三十日）、永井玄蕃頭尚志は長崎表御用を仰付けられ、同月二十五日（陽暦五月二十一日）、長崎へ出向くよう御暇を賜わった。御目付永井尚志の就任後間もない五月、オランダから軍艦蒸気船をこの夏持渡すといふことになっているから、もし持渡ったならば代価はどうして支払うか、軍艦運転の術はオランダ人より稽古をうける筈であるが、人数が足りないで、その方法はどうするか、造船の件はどうするかなどを幕府と交渉していた。

この年五月には、幕府は浦賀において、イギリス船を倣って、鳳凰丸（長さ二十二間、幅五間、二本櫓）を新

造し、これと前後して薩摩藩も三本櫓の帆前船昌平丸を建造したが、これがわが国における洋式軍艦の濫觴であった。これは天保九年（一八三八年）、水戸藩が幕府に建議して日立丸を造船することを申出て、当時まだ鎖国政策の一端たる大船建造の禁がとけなかったため、却下されて以来、十六年後のことであった。

さて、こうした国際的動乱の最中、即ちこの年の七月（一八五四年八月）、オランダ東洋艦隊所属の軍艦シンビン号 *Soenjing* が長崎に入港した。これによって、幕府はシンビン号の在船三ヶ月の間に、「地役人又は当地在住商工共之相撰調練其外伝授為受」ることが決し、艦長グ・フ・ビウス *G. Fabius* はその求めに応じて、海軍に関する初歩の学術を伝習し、同時に長崎警備を担当した黒田、鍋島両藩の家臣の参加を許した。こうして、その秋、幕府とオランダ政府との間に、蒸気船シンビン号を幕府に寄贈すること、砲十門乃至十二門を備える百馬力のコルベツト艦二隻を日本政府のために建造し、その一隻は一八五七年（安政四年）中に、他の一隻はその

翌年中に交付すべきこと、先にスンビン号において実施した伝習を続行する準備としてグ・ファビウス中佐を再度日本に派遣すること、スンビン号の操縦を教えるため、適当な専門家を出島に滞在せしめることなどを決定したのである。

この決定に基づき、翌年六月八日（陽暦七月二十一日）、グ・ファビウスはフェデー号 *Gedeh* に搭乗、幕府に寄贈すべきスンビン号を率いて長崎に入った。スンビン号には海軍伝習隊長ベルス・ライケン *G. C. C. Pels Rijcken* 以下、二十二人の派遣教官が塔乗していたが、同月十一日（陽暦七月二十四日）、クルチウスは「和蘭国王ゴロートヘルトルファンリクセムビュルグより献貢物として蒸気船スームビング捧げ奉り候」と申出、オランダ国王ウィルレム三世の名において幕府に贈呈されたので、直ちに観光丸と改称された。ここに漸くわが国最初の近代的海軍の創設の実現をみた訳であるが、この伝習の交渉に際し、クルチウス及びグ・ファビウスは、共に、伝習生の予備教育として、オランダ語の教育を実施して

置くことが必要であり、得策であることを勧告した。

幕府はこの海軍伝習開始のため、着々として準備を開始し、安政二年七月二十九日（一八五五年九月十日）、老中達を以て、長崎在勤御目付、永井岩之丞（後の玄蕃頭）尚志に対し、「阿蘭陀献貢之蒸気船の運用其外為伝習被遣候者共之指揮掛引等都而之進退取締方引請取扱可申」と命じ、同時に浦賀奉行、勘定奉行、船手目付、長崎奉行、大船製造掛に命じて各々その配下より伝習要員を指名し、小十人組学問所教授方出役矢田堀景藏（鴻）、小普譜勝麟太郎（後の安房守義邦、号は海舟）、徒士目附永持享次郎を選抜して指揮官要員とし、永井尚志の指揮下に入らしめた。八月十日（陽暦九月二十日）、牧野藩士小野友五郎も航海測量伝習の参加を命ぜられ、同月二十七日（陽暦十月七日）、矢田堀、勝、永持以下二十名は「蒸気船製造並運転大砲打方」、小野友五郎等、十五名は「蒸気船運送船打並航海測量御用」となって、伝習地、長崎に向ったのである。そして江戸時代初期から長崎防備を担当していた佐賀藩（四十六人）及び福岡藩

## 第一節 長崎における海軍伝習の創始

(二十八人)をはじめとして、薩摩藩(十六人)、熊本藩(五人)、萩藩(十五人)、津藩(十二人)、福山藩(四人)、掛川藩(一人)も伝習生を送り、幕府派遣の伝習生が長崎に着いた十月より伝習が開始されたのである。

あった。

監督取締は永井岩之丞尚志、教場は長崎奉行所西役所であり、教官はペルス・ライケン Pels Rijcken(航海術、運用術)、ス・ガラウエン S. Graauwen(造船学、砲術)、エーグ・フェグ(船具学、測量術)、デ・エング・デ・Jonge(算術)、機関士(機関学)、下士官(砲術調練)であり、この他に地理学、歴史学、築城学、騎馬調練、艦砲及野山砲教練、手銃教練、太鼓打法等が実施されたのである。この際の伝習は、陸上(講義時間は午前八時より十二時、午後一時より四時まで)と、海上(時折)に分けられていたが、安政四年三月四日(一八五七年三月二十九日)、永井尚志は長崎を去り、江戸に向った。最初の海軍伝習は、ここに終焉をみるに至り、やがて第二次海軍伝習の開始に至る端緒となったが、このような時代の要請によってボンベの医学伝習も開始されるので